

第30回
東京国際映画祭
日本映画スプラッシュ部門
正式出品作品

第19回
全州国際映画祭
ワールドシネマスケープ部門
正式招待作品

北村美岬 伊東茄那 笠島智 並木愛枝

廣末哲万 日高啓介 金子岳憲 松本勝 リャオ・プエイティン

監督・脚本：杉田協士

A PICTURE BY
KYOSHI SUGITA

だれかをおもひ気持ちになる
この世界のひかりになる

『ひかりの歌』
都内凱旋上映決定！

東京都写真美術館ホール

8/3(土)～12(月・振休)

※8/5(月) 休館

【特別上映】

『ひとつの歌』

『河の恋人』『遠くの水』

原作短歌：加賀田優子 後藤グミ 宇津つよし 沖川泰平
撮影：飯岡幸子 音響：黄 永昌 編集：大川景子 小堀由起子
音楽：スカンク / SKANK カラリスト：田巻源太
写真：鈴木理絵 題字：岸野統隆 配給：GENUINE LIGHT PICTURES
製作：光の短歌映画プロジェクト 2017 / 日本 / カラー / 5.1ch / スタンダード / DCP / 153分

<http://hikarinouta.jp>

ひかりの歌

この世界に登場する人たちは、映画が始まる前から、映画が終わった後でも、いや、もしかしたら映画など存在しなかったとしても、きつとどこかに生きている。学校の美術室、閉店してゆくガソリンスタンド、小さな町の写真スタジオ、それらは単なる映画の舞台ではなく、本当に彼らが生きている世界なのだ。「シャーちゃん」とぶつかりばうに呼ぶ声。埋めがたい距離をごまかす「ハハハ」という小さな笑い声。場違いな告白。物語にならない誰かへの想いだけが呼吸するように重ねられる時間の果てに、突然二編の詩が立ち上がる瞬間が訪れ、イメージが結晶化する。私は息を飲む。ああ、これは映画だったのだ。そして「ひかりの歌」は私たちのすべての生をそとと包み込んで歌う。この世界を信じて良いのだ、と。

諏訪敦彦（映画監督）

静かでさりげなくて優しいのに、見終わったあとにとてもかき乱された。この映画の中の光と闇は、目を開けていられないほど眩いわけでも、ぞつとするほど真つ暗なわけでもない。だからこそ少し不安定で足元が覚束ないような気持ちになった。普通の人は叫ばない、ということも、この映画を見て改めて思った。叫んで発散させないで、胸の中に光と闇を共棲させて生きていくんだと思った。

山本文緒（小説家）

すごい良かった。日常を平熱通りに切り取った映像は、切なく美しく、こんな中に私達みんないるんだなと思うと、帰りの電車の中、全ての人が愛おしくなった。

高橋久美子（作家・作詞家）

誰かと一緒にごはんを食べたくなる映画です。話すことなんて「これうまい」とか「最近寒いね」とかで構わない。声や表情や仕草で受け取れる。そういう場所ではそのくらいがちようどいい。でもそういうときに限って、突然泣き出したりとか、スツといなくなったりとか、外で誰かへの想いを告白したりとか、ちようどよくないことも起こってしまう。この映画には、そんなちようとした逸脱も含めた人間の営みが全部つまっている。これらは映画の内容と一切関係ないですが、観たらわかるんじゃないかと思えます。誰かとごはん食べたくなるつてことは。

松井周（俳優・劇作家・演出家）

四粒の宝石たち。それぞれの光を見ていたら、臆病な自分に気づいた。大切に想う誰かに、一歩だけいいから近づいてみないと。友達でも恋人でも家族でも。

林あまり（歌人）

それぞれの短歌が、うれしそうに光って、生きていました。

東直子（歌人・作家）

杉田協士監督、『ひとつの歌』以来7年ぶりの長編作品。

それぞれ孤独のなかを生きる女性たちを、ときに静かに、やさしく包む光がある。



31音から零れた世界を想像する、それが短歌の楽しみ。夜中の自販機が、こんなにせつないなんて。杉田監督が短歌から掬いとった、美しいひかりたち。

天野慶（歌人）

女が秘める想いとるべなき。歌のひかりが照らし出す彼女たちの横顔は、静かにうつくしい。なぜ知っているのですか？ 闇をひた走る今日子の力強い足取りや、早朝に駅のホームに立つ雪子の姿を見守りながら、私は問いかけていました。なぜ知っているのか？ その問いかけで胸が張り裂けそうでした。第4章、夫婦の止まった時間が動き出す瞬間に、深く唸りました。映されたものの外側を想像させてくれる稀有な名篇です。

文月悠光（詩人）

一首の短歌から紡がれる芳醇な物語に心の震えが止まらない。まるで短歌の音節を刻むように、『ひかりの歌』は様々なリズムで溢れている。キャッチボールの音やランニングの息遣い、そしてブルース。出会いと別れの情感が、旋律となつて心の琴線を震わせる。極上の短編小説を映像で味わう全く新鮮な飲びに包まれて、歌を詠んでひかりに乗せたいと僕も思った。

矢田部吉彦（東京国際映画祭プログラミング・ディレクター）

なんと贅沢な映画だった。紳士で口数も少なく穏やかで控えめな見かけの杉田くんは、実は超欲張りなわがまま野郎だと確信した。歩く人と自転車に乗る人、走る人と座る人、フリースと車と列車で旅する人、語り得ない旅から帰ってきた人。70年代から80年代にかけてのヴェンダース映画の10数年を1本に収めた上でさらにこれから先を示す現代映画にしようという野心。ここではないどこかではなく今ここにある何処かを誰もが旅することができると、我々を束の間で永遠の瞑想へと誘い続ける映画だった。これを見たら誰もが今自分がどこにいるのかまったくわからなくなり、しかしいるべき場所に確実にいるのだと根拠のない確信を持つに違いない。

樋口泰人（Body）



多くを語らないセリフや映像の中に感じる、登場人物の感情の奥行きに、観ている側の想像力で過去たちを想い考えさせられ、その人の人生を旅しているような、不思議な体験が出来た、とても密度の濃い、優しさに溢れた映画でした。普段あまり真面目な言葉で映画の事を語らないので普段通りに書く

と『めちやくちやいいんで絶対観た方がいい映画！』です。この映画に出会えて良かった。

小田学（映画監督）

この時代の、この町で暮らすボクラにとつて、無言で立ち続ける自動販売機的光や、明けない朝に凜と佇む始発電車の光は、きつと誰かのより所になっている。水面に波紋が生まれるように、静かな光は人々の寂しさを哀しきの影に柔らかな輪郭を与える。そんな押し付けがましくない優しい光こそ、この映画そのものだ。

西尾孔志（映画監督）

わたしたちが日々つまずく、小さな階段やでこぼこ道を、大きく飛び越えていくのではなくて、ひたひたとその感触を確かめながら歩いていく勇気をくれる映画。しばらく歩いているうちに、すつと雲の切れ目にでくわして、気づいたらひかりの中にいました。この映画が産まれてきてくれてうれしい、と思いました。

清原惟（映画監督）

ずつと誰かの背中を追って走ってきて、気がつけば誰の背中を追っているのかもわからなくなった。ひさしぶりに振り返ってみると、そこにはこちらを見つめている人がいた。そのまなざしに応えられるかどうか、そこからようやく人生がはじまる。そんな映画だった。

宮崎大祐（映画監督）

杉田協士監督は3人称で世界を俯瞰しないし、主人公の1人称視点で内面を描くこともしない。誰かを想い続ける君や、ひたすら走り続ける君の傍らを、静かに伴走する。これはそんな2人称の映画だ。短歌4首。31文字が放つ一瞬の光芒がチーンのようにつながり次々に映像化されていく興奮。4人の女性の胸をしめつけられるような孤独がとにかくリアルで愛おしい。

盛田隆二（小説家）

暗闇のなかで息をひそめて、四人のわたしの人生を見守る。無機質な「ひかり」があたたかく、誰かの口ずさむ「歌」が優しく沁みわたる。今まで見たどの作品にも似ていないのに、なぜかとても懐かしい気持ちになったのは、はじめて映画を見た時のことを思い出したからかも知れない。

和田清人（脚本家）

杉田監督に初めてお会いした時にその目を見て、直感的に「この人の前では嘘をつけない」と思った。そのすぐあとに『ひかりの歌』を観て、杉田協士という人間そのものみたいな映画だと心からよこんだ。わたしにとつてあまりにもやさしい、大切な映画です。

山中瑤子（映画監督）



この映画を形容する言葉がどうしても浮かばない。凄く、素晴らしい、傑作……どんな言葉もこの映画の価値を下げる様で。杉田君、クソほど面白かったわ。

保坂大輔（脚本家・映画監督）



この映画にはしばしば沈黙が訪れる。気まずい。「なんか、もつとこう気持ちい」を伝えなさいよとおせっかいに背中を押したくなる。でも主人公たちは決してペラペラしゃべらない……。見終わった後、饒舌な映画だと思った。行き交わない気持ちがあるから、歌や映画は作られる。気持ちのいい映画だった。

伊野孝行（イラストレーター）

杉田協士監督の『ひかりの歌』を見てしまった衝撃というべきものから、まだ抜け出せないでいる。この映画（映画だとすればだが）に登場する人物たちの今後やその

前史を思いめぐらすにはいられないからである。それは惜しげも無く断切られた登場人物の魅力的な存在感に打たれたからではあるが、その視点からの距離のせいでもある。つまり、カメラは登場人物たちを解釈することを禁じている。近写の場合でも同じであろう。観客は登場人物が何を考えているかだいたい想像ができる。しかし、どうしてこのような行動をとるのはまったく分からない。これが、『ひかりの歌』の特異な魅惑だ。その意表を突く様が、各エピソードを通じて反復され、またその行動は大胆さを増す。この感情と行動の断絶とは、『ひかりの歌』の作られ方自体が、途轍もない自由さに基づいていたからかもしれない。これほど、作られたという印象から遠いフィルムもないのである。

筒井武文（映画監督）

人々の後ろ姿や背中が印象的な静かで美しい映画。歩く、走る、泣く、笑う、黙る、食べる、歌う。誰かを見つめたり、誰かに見つめられたり。寄り添ったり、すれ違ったり、ひとり孤独になったり。この映画が切り取ったささやかで何気ない時間は、気がつけば魔法をかけられたようにキラキラと輝き出していた。今度、杉田くんに会ったら、その魔法の秘密をこっそり教えてもらおうと思っている。

古澤健（映画監督）

菊地健雄（映画監督）



STORY

都内近郊に住む、美術講師として高校に勤めている詩織、ガソリンスタンドでアルバイトをしている今日子、バンドのボーカルとして活動する雪子、写真館で働く幸子は、それぞれ誰かを思う気持ちを抱えつつも、それを伝えられずに日々の生活をつづけている。旅に出してしまう同僚、閉店が近いガソリンスタンドの仲間、他界した父親、長い年月行方知れずの夫のことを思いながら、4人は次の一步を踏みだしていく。

- 第1章 反対になった電池が光らない理由だなんて思えなかった (原作短歌：加賀田優子)
- 第2章 自販機の光にふらふら歩み寄り ごめんなさいってつぶやいていた (原作短歌：宇津つよし)
- 第3章 始発待つ光のなかでピーナツは未来の車みたいなかたち (原作短歌：後藤グミ)
- 第4章 100円の傘を通してこの街の看板すべてぼんやり光る (原作短歌：沖川泰平)

<http://hikarinouta.jp>

[@lyssupport](https://twitter.com/lyssupport)

© 光の短歌映画プロジェクト

北村美岬 伊東蒨那 笠島智 並木愛枝 廣末哲万 日高啓介 金子岳憲 松本勝 リョオ・ブエイティン 西田夏奈子 渡辺拓真 深井順子 佐藤克明 橋口義大 柚木政則 柚木澄江 中静将也 白木浩介 島村吉典 鎌滝和孝 鎌滝富士子 内門侑也 木村朋哉 菊池有希子 小島歩美 岡本陽介 監督・脚本：杉田協士 原作短歌：加賀田優子 後藤グミ 宇津つよし 沖川泰平 撮影：飯岡幸子 音響：黄永昌 編集：大川景子 小堀由起子 音楽：スカンク / SKANK カラリスト：田巻源太 写真：鈴木理絵 題字：岸野純隆 配給：GENUINE LIGHT PICTURES 配給協力：宣伝：髭野純 宣伝：平井万里子 宣伝デザイン：篠田直樹 製作：光の短歌映画プロジェクト 2017/日本 / カラー / 5.1ch / スタンダード / DCP / 153 分

全国でのロングラン公開を果たしている杉田協士監督 7 年ぶりの長編作品『ひかりの歌』。この度、東京都写真美術館ホールでの都内凱旋上映が決定しました。さらにリクエストの多かった未ソフト化の劇場デビュー作『ひとつの歌』、『河の恋人』『遠くの水』の特別上映も行います。杉田協士監督の軌跡を辿るこの機会に是非足をお運びください。

特別上映



第24回東京国際映画祭
日本映画・ある視点部門 正式出品作品

『ひとつの歌』

(100 分 / 2011 年)

監督・脚本：杉田協士／撮影：飯岡幸子／
音響：黄永昌／音楽：柳下美恵

出演：金子岳憲、石坂友里、柳野浩一、天光真弓、塩見三省

またいつかはかかなたですれちがうだれかの歌を僕が歌った

はじまりは一枚のポラロイド写真だった。世界でただひとり、誰も知らない小さな秘密に気づいたとしたら…。でもその秘密が、自分の愛する人の人生を左右するものだったとしたら…。孤独に生きてきた青年が、誰かのことを思い、誰かのことを守るために初めて生きようとする。



『河の恋人』

(77 分 / 2006 年)

監督・脚本：杉田協士／撮影：松本岳大／音響：黄永昌

出演：表桐子、藤岡宏美、眞島秀和、天光真弓、塩見三省
父親の失踪の秘密を誰にも告げずにきた桐子の、ある一日の物語。



『遠くの水』

(23 分 / 2014 年)

※『河の恋人』と併映

監督・脚本：杉田協士／撮影：飯岡幸子／音響：黄永昌

出演：松村こりさ、磯部義一、内野萌子、遠藤創平、大田優介、小畑はづき、高橋由佳、本田淳也
愛媛から東京に移り住んだばかりの雪子が、戦場に入り出る青年と街で出会う。

上映スケジュール

8/3 (土)	11:00 『ひかりの歌』	14:00 『ひとつの歌』
8/4 (日)	11:00 『ひかりの歌』	14:00 『ひかりの歌』
8/5 (月)	休館	
8/6 (火)	13:00 『河の恋人』+『遠くの水』	15:00 『ひとつの歌』
8/7 (水)	14:00 『ひかりの歌』	
8/9 (金)		
8/10 (土)	11:00 『河の恋人』+『遠くの水』	13:30 『ひかりの歌』
8/11 (日)	11:00 『ひとつの歌』	13:30 『ひかりの歌』
8/12 (月・振休)	13:30 『ひかりの歌』	

※期間中、トークショー及び舞台挨拶実施予定

当日料金

『ひかりの歌』

一般 1,700 円 / 学生 1,500 円 /
シニア・中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方 1,100 円

『ひとつの歌』 / 『河の恋人』+『遠くの水』

各作品 一般 1,500 円 / 学生 1,300 円 /
シニア・中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方 1,100 円

8/3(土) ~ 12(月・振休) ※8/5(月) 休館

東京都写真美術館ホール

www.topmuseum.jp

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3

JR 恵比寿駅東口より徒歩約 7 分

東京メトロ日比谷線恵比寿駅より

徒歩約 10 分

至 渋谷

東口

動く通路

恵比寿ガーデンプレイス

JR 恵比寿駅

日比谷線恵比寿駅 1 番出口

TOP MUSEUM

※写真イメージ



『ひかりの歌』特別鑑賞券 ¥1,400 (税込) 発売中

劇場窓口特典：ポストカード (数量限定)